

今村紫紅筆「近江八景」の写実性に関する考察

—「近江八景写生帳」を起点として—

はらだ あやほ
原田 礼帆 (名古屋大学)発表
要
旨14
時
10
分
—
14
時
50
分松
ヶ
崎
・
西
キ
ャ
ン
パ
ス
内
セ
ン
タ
ー
ホ
ール

今村紫紅(1880-1916)は明治末から大正期にかけて活躍した日本画家である。短い画業において日本画の可能性を模索した作品を発表し、代表作のうち「近江八景」は、近代の風景画の領域に新たな『八景』を創り出したとされている。発表当時の批評において本作は、純粹な日本画ではないという批判的な文脈からではあったが、色彩の新しさが認められ、西洋画との近似性が注目された。一方で戦後の主要な研究では大胆な構図と色彩による点描を用いてやまと絵や琳派に南画を融合したと評価され、西洋画的表現は等閑視されている。

本発表では「近江八景写生帳」の分析を起点とし、写実性の視点から本作を読み解くことで、紫紅が伝統的画題を近代化するにあたり新しい風景観に即した絵画表現を試みていたことを示す。写生帳を元にした現地調査により本作制作時における写生地が推定され、実景写生が画面構成に活用されていることが判明した。更に写生帳に残る下図より、倣古的性格の強い「瀬田」「堅田」「石山」の三幅は写生旅行以前の早い段階で構想されたと考えられる一方、他の五幅は写生の成果を比較的好く取り込んでいるため現地写生の後に構図が立ち上げられたと推察される。本作では八幅を通じて、伝統的型による風景表現と写生的表現の双方の要素がせめぎ合っている。本発表の観点からは、「比良」において、図様面で写生の成果を取り入れていることに加えて、山の岩肌について岩絵具の粒状感を活かすべく奉書紙に渴筆を用い、対象の物質性に即した質感描写が為されていることが注目される。

本作における写生を活かした表現の背景には志賀重昂著『日本風景論』をはじめとした風景観の変革や、高島北海の地学を南画の皴法に結び付けた絵画表現などにより、科学的な視点を日本画へ導入する動向があった。紫紅は本作制作にあたり写生旅行を経た写実的な表現を絵画構成に取り入れることで、伝統的風景表現を乗り越え、更には瀟湘八景成立以来この画題に内包された季節や時間の要素を排除し、実在の景そのものに根差した風景画を成立させている点で、新たな表現を確立している。科学の眼を通した写実性を追求することで、日本画家紫紅もまた、本作制作当時においては、前近代を超克し、西洋的近代を摂取する社会の大きな流れの中に身を置いていたと考えられる。

紫紅が奉書紙や岩絵具などの画材の物質性を利用して対象の質感の描き分けをしていることは上述の通りだが、そのような絵画表現は20世紀の日本画が絵画的画面の面白さを追求する中で重要な課題となっていくものであり、紫紅の試みがその後の日本画の動向の端緒となったという意味でも本作は重要な意義を持つ。戦後の南画的表現を重視した批評では、本作に見られる上記の諸特徴は軽視されており、本発表では写実を活かした風景表現を模索した作家という新たな紫紅像を提供する。